

ブエノスアイレスの冬

真冬の東京を発ち、こちらにきて約5カ月、地球の反対側で、再び冬の季節を迎えている。もっとも、ブエノスの冬は比較的穏やかである。緯度のうえでは、赤道を挟んで、神戸、大阪とほぼ同じ位置にあるが、7月（真冬）の平均気温は約10度、湿度が高いとはいえ、日本人の感覚では、むしろ晩秋か初冬といったところである。とくに、今年は冬にしては暖かい日が続く、近くのパレルモ公園では、ジョギングやサイクリングをする人に混じって、深い木立の間を、落葉を踏んで散歩する老夫婦の姿をみかけることが多い。学校は7月の2～3週間冬休みとなり、普段みかける紺色の制服・ネクタイを着けた生徒達もどこかへ行ってしまふ。学生にとっては、前期の試験があり、手を抜けない時期でもある。

7月に入ってからは、湿気の多いドンヨリとした曇り日が続くようになった。これが本来の冬の天候であるらしい。しかし、時に、冷たい南風が吹き込み、大粒の雨と激しい雷鳴をもたらすことがある。広大なパンパを控えているだけに、一日の気象の変化は想像以上に激しい。夜明けは遅く、8時頃になってやっと空が明るくなり、地下鉄やバスなどで通勤ラッシュが始まる。冬のバカンスを利用して旅行に出かける家族も多いが、それでもかなりの込みようである。紳士淑女に囲まれて安心していると、スリにやられる場合もある。

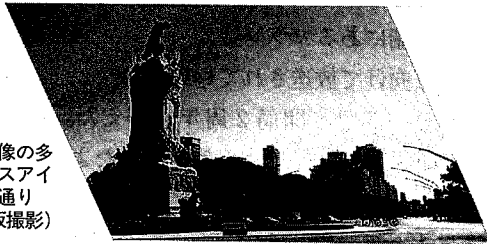
沈鬱なブエノスの冬を彩るのは、華やかなコロソ劇場の演奏会と迫力ある大農牧展の開催である。コロソ劇場は1908年に建設され、世界三大劇場の一つとして、その豪華さを誇る。シーズンの通し切符は、いくつかのプログラムに分けて4月頃から売り出される。世界的に著名なオーケストラや演奏家などが、北半球の夏を避けて、次々とやってくる。劇場自体のオーケストラ、合唱団もこれと共演する。7、8月はコロソ劇場の最も賑わう時である。農牧展は、アルゼンチン農牧協会が主催し、今年で101回目を迎える伝統ある一大博覧会である。毎年7月末から約1カ月間、牛・

馬の品評会、競売、農業機械の展示等を含めて多彩な行事を繰り広げ、アルゼンチンの屋台骨を支える農牧業の実力を誇示するのである。アルゼンチン農牧協会は120年前に農牧場主達によって創設され、その後の農牧産品輸出経済の拡大に重要な役割を果たした。現在、同協会は、首都の一角、パレルモ地区の広大な敷地に、厩舎、馬場、展示場、レストラン、事務所などをもち、コロソ劇場とともに、首都を代表する顔の一つとなっている。同協会が、アルゼンチンのかつての華やかな繁栄を演出したものであるとすれば、コロソ劇場は、その繁栄の頂点を享受したものであるといえることができる。しかも、この両者は、現在もなおアルゼンチンの経済と文化を代表する二大主役たる地位を保持しており、ブエノスの冬をよりいっそう印象深いものにしているのである。

ブエノスに滞在し、しかも冬の季節にあつて、サッカーやタンゴについて語らないのは、片手落ちといわれるかもしれない。とくに、今年は、1917年から数えて26回目の南米チャンピオンを定めるアメリカ・カップが、ブエノスを中心に開催され、サッカー熱を高めたこともあつた。しかし、マラドーナを含めて、アルゼンチン・チームは調子が出ず、ウルグアイに優勝をさらわれる結果となつた。タンゴについては、米国や日本ではブームだそうであるが、本場でのタンゴ熱がとくに高まったとは感じられない。外国での評判に対して、本家が追従するようなことがないのは、当然といえば当然のことである。それよりも、いま、アルゼンチンで、一つの大きなブームの主演を演じているのは“日本経済”である。勿論このブームはアルゼンチンだけということではできないが、新聞、テレビ、ラジオなどで連日のように“日本経済”が報道される。日本の首相の名前が、これほど頻繁に当地のマスコミに取り上げられることは、これまでなかったことであろう。いまや、首相の顔写真を間違ふものはいない筈である。マスコミの報道は、主として、外電と日本・米国から

● 小坂允雄 (在ブエノスアイレス海外調査員)

の間接的情報に依拠している。社会や文化に関連する記事は少ない。全体として、日本経済の急成長を積極的に評価し、それに対する期待を込めた論調のものが多く。この傾向は、基本的には、今回のブーム以前から続いているものであるが、最近では、記事の量が増える中で、急速な成長の背景にある日本社会の変化に目を向けるものも出てきつつある。日本人から直接取材した記事も目につくようになった。当然のことながら、日本社会にも“光と影”がある。日本に対する関心が、一時的ブームをこえ、静かで多様な広がりを持つも



公園と銅像の多いブエノスアイレスの大通り
(小坂撮影)

のに定着していくことが望まれる。しかし、それにはまだしばらくの時間が必要なようである。急速な円高による日本経済の巨大化が与えた印象は、当地においても強烈であった。日本ブームは、変化の兆しはあるにしても、まだ続いている。しかも、日本に対する関心は、いまや、議論や分析の段階をこえ、世界経済や途上国に対してなしうる日本の“行為”に集中している。日本がなすべきことは多いと考えられる。しかし、そこにおいて重要なことは、世界の諸問題に対して、共に悩み、共に考えるという姿勢ではないだろうか。

日本ブームは、現在、アルゼンチンが抱える多くの困難な問題を意識したものである。実際、秋から冬にかけてのこの短い期間においても、アルフォンシン政権は、政治・経済上の多くの危機に直面してきた。その中でも、とくに、4月のセマナ・サンタに起こった一部若手将校の反乱は、ローマ法王来訪の興奮からまだ醒めやらない時であっただけに、現政権のみならず、多くの国民に深刻なショックを与えた。4月14日、コルドバ州

の一下級将校が、人権裁判への出頭を拒否したことがきっかけで、これに同調する動きが出始め、4月16日には、首都近郊の軍基地内に120人以上の中堅将校が立て籠もる事態にまで発展した。彼らは、民政下の軍批判に強い不満を現わし、軍人に対する人権裁判の中止、軍首脳の変更を要求した。マスコミはこの事件をいっせいに報道、民衆は大統領府前の5月広場に続々と詰めかけ、大規模な集会・デモを繰り広げた。ラテンアメリカ諸国からも民政支持の声明が次々に寄せられた。しかし、軍首脳はこの反乱に対処することができず、結局、4月19日、大統領が直接説得に出かけたことにより、事態は一応收拾された。この事件は、現民政下において、軍部内の不満が、場合によっては直接行動に出るほど強いものであること、また逆に、民政の定着にはなお多くの時間が必要であることを国民に印象づけた。その後、5月に入ってから、国内各地で爆発物が仕掛けられる事



どんよりとしたブエノスアイレスの冬。ラプタ河が見える(小坂撮影)

件が増え、6月24日には、政府与党の16カ所の事務所が爆破される事態が発生した。さらに、7月2日には、ペロン元大統領の遺体の両手首が切断され、それと交換に800万ドルを要求する手紙が、ペロニスタ幹部にきていることが明らかとなった。手首はすでに何年も前に切られていたとする報道もある。この事件は不可解かつ不気味なものであるが、このような一連の出来事は、9月の総選挙に向けて、現政権を揺さ振るものであることは明らかである。アルフォンシン政権は、現在のラテンアメリカ諸国の政権の中で、比較的堅実な政治・経済運営を行なっていると思われるが、その底流には複雑な動きがあるようである。ブエノスの春はまだ遠い。